

「一流になりなさい。それには、一流だと思ひ込むことだ」という本からです
いつも親身でいること。至誠であること。そのためには手紙を書きなさい。お見送りしなさい。
いい顔でいなさい。

美しくありたく候。会津八一のこの言葉を、尊敬する益田ドライビングスクールの小河二郎会長は、自らの生きる指針としています。島根県益田市は、人口五万人弱。そこにある益田ドライビングスクール（Mランド）には年間六千人を超える教習生が、全国から集まります。全国でベストワンに輝く合宿制自動車教習所なのです。しかも、口コミ紹介率は八〇パーセントを超えます。大学生を対象とした合宿制教習所は、業者、生協からの紹介がほとんどです。ですから、先輩から後輩へ、兄から弟へ、友人から友人へと口コミが広がるこの教習所は、驚くべき存在です。「せっかく、この益田の地まできていただくのですから、免許だけでなく、よりよく生きる流儀を身につけて帰ってください」小河二郎会長は、大学生、高校生にそう語りかけてきました。人生をよりよく生きる流儀。それは、挨拶ということ。自らの心、今を生きる感謝を表現すること。二週間ちょっとの教習所の合宿で、彼らは驚くほど、変わります。広島の大学の学長が、Mランドについて免許をとってきた学生は、すぐにわかるというほどです。Mランドでは、小河会長以下、親身になって教習生に挨拶を教えます。朝八時からトイレ掃除の会を開き、素手でトイレ掃除をする楽しさを教えます。「教習所に着いたよ。こんなことがあったよと、両親に手紙を書こうよ」と教えます。そして、両親、親御さんに、お子さんから手紙が着いたら、ぜひ返事を書いてあげてください。子供さんもうれしいものですよと手紙をMランドが出します。Mランドを見ていると、子供たち、青年たちに親身に接することで、わずか二週間のうちに人間が変わってしまうものだと教えられます。彼らが教習所を去る日。Mランドのバスに乗って空港や駅へと向かいます。いよいよバスの出発のとき、泣きながら、窓から身をいっぱいに出して絶叫しながら去って行きます。「先生！！またくるよ！！」みんなが口々にそう叫びながら、バスは構内を一周し去っていくのです。Mランドの社員たちは、一列に並んでいつまでも手を振っています。これこそ、日本人が必ず見るべき、未来への明るい確信を胸にできる風景ではないかと思うのです。教習合宿という一瞬の出会いが、かけがえのない自分にとっての宝になる。そんな奇跡のような現場なのです。「いつでもお客さんにはね、親身で、どうすれば喜んでくれるかを考えるんだよ。さあ、あの人をどう喜ばせようかと会う前に真剣に考えてから、お会いしなさい」お客様がこられたら、応接に入る前に、鏡を見て笑顔をつくるんだ。一番これが自分のいい顔だと確信してから、応接に入らな。一回で君のファンになってくれるよ。どうして、船井幸雄は一度会った人間をファンにしてしまうのか？ある顧問先の経営者が先生に質問を投げかけたときのことで。「肩書きや立場で、付き合い方や振る舞いを変えないことです」「お会いしたら必ずその日のうちに手紙を書くことよ。また会いたいと思ってくれるものです」信頼は、かけた手間に比例するものだと、船井先生に教えられます。船井先生のオフィスを訪ねると、どんなときでも執務室の外まで私たちを見送りに出てくる先生の姿に、至誠、その言葉の生きた見本を示していただきました。そして、その姿は、本当に美しいものだと思ったのは、私だけではないでしょう。人間、美しくありたく候と思えなくなった時点で老人になるのだよ。船井先生や小河二郎会長の生き方が心にささやくのです。

船井先生は、信頼は何に比例すると言っていますか？

()

人間は、美しくありたく候と思えなくなった時、どうなると言っていますか？

()